

子どもの明日 応援プロジェクト

< 対談 >

子どもの明日 応援プロジェクト

～企業とNPOの信頼関係を通じて～



子どもの明日 応援プロジェクト

< 対談 > あしなが育英会

～企業とNPOが支え合う歩み～

過去の対談

2013年度



NPO法人  
日本渚の美術協会

～企業とNPOの強みを生かして～

2012年度



「子どもの明日 応援プロジェクト」  
がめざすこと

～子どものこれからを、育む～



子どもの明日 応援プロジェクト

## ＜対談＞あしなが育英会

～企業とNPOが支え合う歩み～

子どもの明日 応援プロジェクト

明治安田生命は「あしなが育英会」のご協力のもと、全社共通の社会貢献活動として「あしながチャリティー&ウォーク」を展開しています。当社が独自に主催する「あしながMYウォーク」の開催、あしなが育英会（あしながPウォーク10実行委員会）が全国各地で開催する「あしながPウォーク10」への参加、そしてチャリティー募金を通じて、遺児支援に取り組んでいます。

あしなが育英会で理事を務める岡崎さんと、あしながMYウォークを所管する広報部の富吉が、これまでの活動を振り返り、活動が生み出したものと、今後の展望について語りました。



富吉 久雄

明治安田生命保険相互会社  
広報部 広報推進グループ  
グループマネジャー



岡崎 祐吉さん

あしなが育英会  
理事  
教育・国際担当

## ボランティア精神の拡がり子どもたちへのエールとなる



■2013年あしながMYウォークの様子(東京)

**富吉** “親をなくした子どもたちに進学之梦と心のケアを”を合言葉に、「子どもの明日 応援プロジェクト」の一環としてスタートした「あしながチャリティー&ウォーク」は、当社従業員だけではなく、その家族や知人にまで広がり、今では当社従業員のほぼ全員にあたる約3万8千人がこの活動にかかわっています。当社独自のチャリティーウォークイベント「あしながMYウォーク」と「あしながPウォーク10(以下、Pウォーク)」では、今ではおよそ1万2千人の従業員等が参加するようになりました。支援の輪がここまで広がったのは、あしなが育英会様の遺児支援の理念や活動に、多くの従業員が共感して、ボランティア活動を通じて、親をなくした子どもたちをサポートしようという社会貢献意識が全社で育まれたからだと思います。

**岡崎** 私どもが実施しているPウォークへはさまざまな企業や団体のみなさまに参加いただいておりますが、明治安田生命様は、Pウォークへの参加とあしながMYウォークの開催を通じて、最も多くの方に参加いただいている企業の一つです。温かいご支援、本当にありがとうございます。

我々が支援いただいているのは、経済的な援助だけではありません。活動の目的の一つである「活動の趣旨と、遺児の現状を知っていただく」という点においては、多くの従業員の方々の参加によって、全国に理解・支援の輪が広がっていることも力強いご支援だと感じています。そして、こうした支援は、辛く苦しい思いをしてきた子どもたちにとって心の励みになっています。また、Pウォークの運営やMYウォークのお手伝い等を通じて、遺児学生たちが大人たちと同じ目的を持って同じゴールをめざす機会を持つことは、大人にふれあう機会の少なかった遺児学生たちにとって、社会の仕組みや厳しさを知る良い機会でもあるんですね。そして、こんなに多くの方が自分を支えてくれているという実感は、彼らにとってもなによりのエールになります。

**富吉** 我々にとっても、あしながチャリティー&ウォークは、遺児のみなさんと直接ふれあうことができる良い機会です。運営に励む遺児学生のみなさんの姿に、当社従業員も励まされています。

## 社会貢献活動の輪は、小さなきっかけから

**岡崎** Pウォークを開始するにあたって、アメリカ・ニューヨーク最大のチャリティーウォーク「ウォークアメリカ」を参考にしました。私は学生時代に視察に行ったのですが、大人も子どももお年寄りも、みんなが同じTシャツを着て楽しそうに歩く姿にとっても感動したのを覚えています。参加企業も、ゴール後にレクリエーションを行なうなど、社員の絆を深める場として活用していました。社会貢献活動と聞くと、少し敷居が高いと感じるかもしれませんが、目的は別にあってもよいと思います。まずは参加して、そこで誰かと出会い、お互いを知っていく。社会貢献活動の輪は意外にそんな小さなきっかけから次第に広がっていくのだと私は思っています。



■従業員が家族とチャリティーウォークに参加  
※オリジナルのうさりんバッジ

**富吉** おっしゃるように、我々の活動も回数を重ねるごとにそういう雰囲気に近い感じがしますね。2013年は、全国63カ所でウォーキングを実施しました。12月1日を「10周年感謝・あしながMYウォーク」として、東京・大阪・名古屋をはじめ多くの地域では、参加した従業員がまったく同じ時刻にスタートして、同じ気持ちを持ってゴールをめざしました。このときの一体感は、今まで感じたことがないくらい大きいものでした。これほど多くの人数が社会貢献活動に参加していることを誇らしく、心強く感じました。あのとき参加した従業員はみんな、私と同じ気持ちだったと思います。



■東京では約3,300人が参加してウォーキングを実施  
(写真は開会式会場となった増上寺境内)

**岡崎** 気軽に参加できるボランティアとして始まったあしながチャリティー&ウォークを通じて、多くの方が参加いただき、一体感を感じていただけるのであれば、これほどうれしいことはありません。それが子どもたちの支援につながるわけですから。

**富吉** 「あしながチャリティー&ウォーク」がこれほど社内で浸透したのは、あしなが育英会様の知名度と理念があってこそだと思います。生命保険を扱う会社として、未来を担う子どもたちへの支援活動「子どもの明日 応援プロジェクト」に取り組んでいますが、あしなが育英会様の活動と私たちの事業はとても親和性が高いといえます。自分の行動が、社会のため、未来を担う子どもたちのために役立っていると実感できる活動は、周りの人にも良い影響を与え、自然と広がっていくものですね。

**岡崎** そうです。また、明治安田生命のみなさんをはじめ、参加いただいた人たちとのふれあいは、先にも申しましたが、Pウォークの運営やMYウォークのお手伝いに携わる遺児学生の心にも「支えてくれた社会に恩返ししたい」という感情を芽生えさせます。辛い経験をしてきたからこそ、自分のためだけではなく、ほかの誰かのためになる生き方をする。学生生活を終えた彼らが社会に出たとき、そうしたやさしい志を持ってもらえたら、チャリティーウォークをはじめとした社会貢献活動の真の意義が果たせたと言えるかもしれませんね。

## ■ 数十年後の約束を果たすために

**富吉** 社会貢献活動は、何よりも継続することに意義があるのだと思います。これは、30年、40年にわたるお約束をお客さまと交わす保険契約にもいえることです。お客さまに人生のサポートを安心して任せていただくためには、やはり30年、40年先も変わらない志を持ち続けることが必要ですから。

**岡崎** 同感です。Pウォークでは全国で10万人が同じ気持ちを持って参加できるような活動をめざしています。一人でも多くの方に参加いただくために、そして将来にわたって遺児学生たちの明日を応援いただくために、明治安田生命様もまた、あしなが育英会の理念に賛同いただき、活動を続けられることを心から期待しています。



**富吉** あしなが育英会のみなさんと出会って、私たちは、人と人、心と心がつながったときに生まれる力の大きさを知りました。思いやりの輪が、日本中、世界中に広がっていくように、私たちも力を尽くします。これからもぜひ、良きパートナーとしてお付き合いをお願いしたいと思っています。

**岡崎** これほど心強いパートナーはいません。同じ志を持つ私たちとしても、これからもぜひよろしくお願いします。

2013年度 &lt;対談&gt;

子どもの明日 応援プロジェクト

## &lt;対談&gt; NPO法人 日本渚の美術協会

～企業とNPOの強みを生かして～



明治安田生命は、お客さまの“家族への思い”を支えることを、生命保険会社らしい社会貢献であると考え、子どもたちの明るい未来づくりにつながる活動に取り組んできました。

取組みの柱の一つに位置づけている『環境意識の醸成』をテーマにした活動では、海岸清掃を通じて収集した漂着物を材料に、アート作品を制作する「海の世界工作教室」を実施しています。パートナーであるNPO日本渚の美術協会の本間さんと、「海の世界工作教室」の推進担当者である広報部の岡部が、活動について、そして企業とNPOの協働についてお話ししました。



岡部 久美子

明治安田生命保険相互会社  
広報部 広報推進グループ  
社会貢献活動・CSR推進担当



本間 清さん

特定非営利活動法人  
日本渚の美術協会  
会長

## 楽しみながら、環境への気づきが生まれる活動



**岡部** 私たちはもともと、家族で楽しく参加でき、子どもたちの自然への思いを育むことをねらいとして「海の世界工作教室」を始めました。開催するたびに子どもたちの真剣なまなざしや笑顔を見ることができ、手ごたえを感じています。

**本間** そうですね。「ボランティアで海岸を清掃しましょう」とか「海岸のゴミについて考えましょう」と呼びかけると身構えてしまう人も、なんだか楽しそうだと、思っただけで参加してくれるのがこの活動の特長だと思います。

**岡部** その通りですね。2007年当時、私たちは、社員のボランティア活動を全国的に広げていこうとしていました。どうすれば実現するだろうかと考えていたとき、日本渚の美術協会さんと出会ったのは幸運でした。従業員が家族を連れて参加でき、子どもたちに対して、楽しみながら環境への気づきを提供できるので、とても好評です。

**本間** 参加する子どもたちは、最初はよくわからずに不安げですが、海岸清掃で次第に楽しそうになり、収集した漂着物を用いたアート作品をつくる段階では、すっかり主人公になっていますよね。子どもたちが主導権を握って大人を引っ張っている様子は、見ていて楽しくなります。

## 家庭で、学校で、話題になることで広がる

**岡部** 家庭内では、日頃なかなか子どもたちと環境について話し合う機会がないですね。家族と一緒に体験し、考えて、あとあと自然と話題にのぼるのもこの活動の魅力です。

**本間** 参加されたみなさんの多くは、帰り道や帰宅後に、家族でその日のことについて会話をしますね。おっしゃるように、普段は家族で環境のことを話す時間はなかなか持てないものです。「海の環境工作教室」の体験を、子どもたちが、学校でも話題にしてくれることがあるようですから頼もしいです。



**岡部** 2010年から数えると、参加者は1,885人になります。その人たちの口から、さらにどんどん環境の大切さが伝播していくことを願っています。また、アート作品も間もなく1,000個になります。想像力豊かでインパクトがあるため、年に1回開催する展示会では、来場者が作品に見入っています。そうした機会を通して、ふと足をとめて自然環境のことに思いをはせる時間を提供できたらと思います。

## 自然を大切にする気持ちは、思いやりにつながる



**本間** 「海の環境工作教室」の終わりにはいつも、「ゴミを捨てない仲間になってくれるかな？」と子どもたちに尋ねるのですが、元気よく「はい！」と言ってくれるので本当に嬉しくなります。人間の出すゴミによって、海鳥やウミガメなどの海洋生物が命を脅かされる例なども紹介したうえで、海岸清掃やアート作品の制作を行ないますから、子どもたちのところに響くのですね。

**岡部** 子どもの頃に体験を通して得る学びは、貴重なものだと思います。

**本間** はい、ですから、大人たちにゴミを捨てさせないようにするより、捨てない子どもを育てるほうが効果的ではないでしょうか。大人も、子どもに注意されると逆らえないですしね(笑)。

**岡部** 生物や自然を大切にする気持ちは、他者への思いやりを持つことにもつながるのだと思うのです。その意味でも、この活動をご一緒できて、本当に良かったと思っています。

**本間** そうですね。実際に、生物や自然のためという以外にも、海岸がきれいになったら、地域に住む人たちにも喜ばれるだろうと想像しながら清掃している参加者も少なくないようです。子どもたちも、誰かの役に立つ喜びを感じてくれたら素晴らしいですね。

## パートナーシップが、シナジーを生み出す

**岡部** 前述しましたように、明治安田生命が、全社的に従業員のボランティア活動を推進していこうとしているとき、日本渚の美術協会さんとの出会いがありました。これまで継続し、広げていけたのは、この活動の中には、環境や地域のためになるのと同時に、家族で楽しみながら参加して、自分たち自身の学びになる要素が込められていたからだと思います。企業として、こうしたノウハウをお持ちのNPOと協働する、最も大きなメリットの一つだと考えています。



**本間** そうであれば私たちも嬉しいです。私たちにとっては、全国にたくさんの拠点を持つ明治安田生命さんとの協働が、活動の範囲を広げる大きな力になりました。NPOは、専門分野におけるノウハウの面で長けていても、組織力や資金力ではまだまだ力不足です。互いの強みを生かし合えるようなパートナーシップによって、活動をより実りあるものにしていければと思います。

**岡部** そうですね。両者で持てるものを出し合って、シナジーを生み出していけるよう、これからもよろしくお願いします。

2012年度

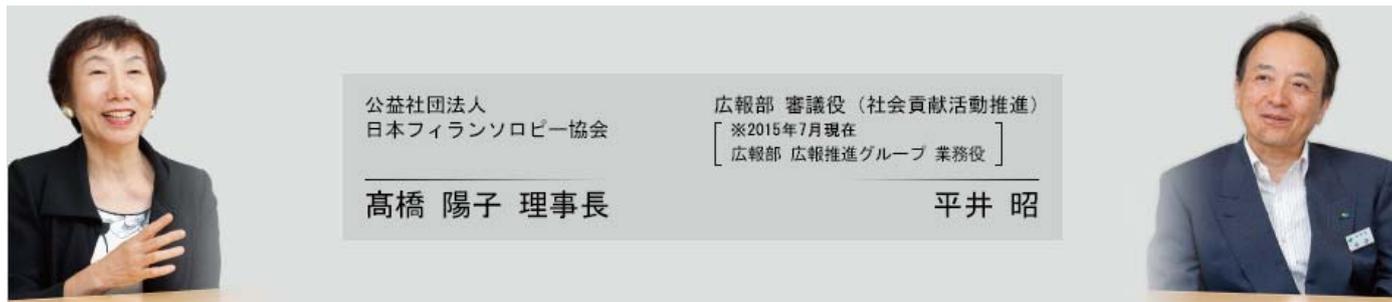
＜対談＞

子どもの明日 応援プロジェクト

子どもの明日 応援プロジェクト

## 「子どもの明日 応援プロジェクト」がめざすこと

明治安田生命が取り組んできた、子どもの健全育成への貢献活動は、2012年度に5年目を迎えたことをふまえ、活動の総称を「子どもの明日 応援プロジェクト」と決めました。この節目にあたり、「民間の支える公益」を提唱する日本フィランソロピー協会の高橋陽子理事長と、「子どもの明日 応援プロジェクト」を統括している当社の担当者が、これまでの活動を振り返りながら、今後のめざすべき姿を共有しました。（文中敬称略）



公益社団法人  
日本フィランソロピー協会

高橋 陽子 理事長

広報部 審議役（社会貢献活動推進）

※2015年7月現在  
広報部 広報推進グループ 業務役

平井 昭

### 日本フィランソロピー協会

一人ひとりの善意や企業の社会責任をカタチにする行動を支援し、心温かく自由闊達な社会をめざす公益社団法人。企業の社会貢献活動・CSRの推進や個人の寄付活動・ボランティア活動を支援し、行政・企業・NPOの橋渡しと連携をすすめています。

### きっかけは「家族を思う気持ち」から

**平井** 生命保険には、家族を守り支えたい、子どもに健やかに育てほしい、などご家族への思いがこめられています。そのなかで、未来を担う子どもたちへの支援に力を入れようと、「子どもの明日 応援プロジェクト」をスタートしました。当社の取組みについて、第三者の視点から、率直なご意見やご感想を伺えればと思います。

**高橋** サステナブルな社会をめざすうえで、大きなテーマが2つあります。「地球環境を守ること」と「次の世代へ引き継ぐこと」。子どもの明日を応援することは、このテーマにも生命保険事業にも沿っていて、非常にいい取組みですね。貴社とはいくつかの活動で一緒にしていますが、みなさん、実直に取り組んでいらっしゃるように感じます。

### 子どもたちに気付きや感動を与える体験を

**平井** 子どもたちがさまざまな体験をすることで、新しい「気付き」や「感動」を感じてくれることは、私たちにとっても喜びです。たとえば「ふれあいコンサート」では、障がいを持った子どもたちが本当にいきいきと楽しんでくれました。それを見た親御さんや先生たちが喜んでくれて、私たちも嬉しくなる。感動の輪が広がっていくのです。

**高橋** それは嬉しいことですね。ボランティア活動は組織を活性化し、社会のためだけでなく、会社のためにもなるといわれています。企業が行なう貢献活動は、多くの人や資金が動くため、社会への影響力が大きい。ぜひ継続していただきたいと思います。

### 人の役に立つことが生きる意欲につながる

**平井** 今、行なっている活動をよりよいものへと発展させるには、どのようなことを考えたらよいでしょうか。

**高橋** 子どもたちが「人のために何かしたい」という気持ちになる取組みができるといいですね。人の役に立つことで、自分の存在を実感し、生きる意欲へとつながっていきます。生命保険の互助の精神も、「人のために」という点で同じですね。貴社の活動が、子どもたちの優しい気持ちを引き出すきっかけになることを期待しています。

**平井** 心がけたいと思います。海岸清掃の際、ゴミを食べて死んでしまう生物がいることを教えると、聞いた子どもたちは翌日、友だちに話して回るそうです。大切なことを伝えなければ、と思うのです。子どもたちが自ら「人のために」「環境のために」と思うようになる取組みをめざしていきます。本日は、大変勉強になるご意見をありがとうございました。